早稲田大学　文化構想学部
2023年度　入試問題の訂正内容

＜文化構想学部　一般選抜、一般選抜（英語４技能テスト利用方式）、一般選抜（共通テスト利用方式）＞

【国語】

●問題冊子１１ページ：設問(三)　問二十三

設問の記述に不十分な部分があったため、適切な解答に至らないおそれがあると判断しました。当該箇所の設問につきましては、解答の有無・内容にかかわらず、受験生全員に得点を与えることといたします。

以上

早稲田大学 2023年度
一般選抜 文化構想学部

国語

（問題）

2023年度

〈2023 R05172023〉

注意事項

1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。

2 問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。

4 マーク解答用紙記入上の注意

（1）印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。

（2）マーク欄には、はっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	●良い	◎悪い	◯悪い
マークを消す時	◯良い	◎悪い	◯悪い

5 記述解答用紙記入上の注意

（1）記述解答用紙の所定欄（2カ所）に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。

（2）所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

（3）受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本									
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9

（4）受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

（例）

3825番

⇩

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は、採点の対象外となる場合がある。

7 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。

8 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。終了の指示に従わない場合は、答案のすべてを無効とするので注意すること。

9 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

10 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

（一）

次のA・Bの文章を読んで、あとの問いに答えよ。なお、Bの文章はAの文章中に引用されている「漢字御廃止之議」である。

A

言語の本体はあくまでオトであるという近代言語学の認識からすれば、たしかに文字は言語にとってたんなる外皮にすぎない。化粧や衣装をいくら奮発してみても人間の体にはなんらの影響も及ぼさないのと同様に、言語をどのような文字で表記するかは、言語の本質にはかかわりのない「外的な」事実となる。したがって、言語学がその研究対象とすべきはオトの研究である。より具体的にいえば、単位としてのオトが音素、形態素、統辞などのそれぞれのレベルで、たがいに関係をとりむすぶやりかたが、その研究領域となるだろう。

しかしそれにもかかわらず、どのような文字表記を採用するかの問題に、どうして人々はあれほど情熱をかたむけることができるのだろうか。また、ほんとうに文字の問題が言語にとって付随的なことであるなら、フランスのアカデミー・フランセーズ、日本の国語審議会、韓国の国語研究所やハングル学会などは、どうでもいい仕事にかかわって莫大な労力を無駄についやす滑稽でおろかな団体ということになってしまう。

文字の問題になると、人々があまりにも感情的になりすぎて、根拠のない同志意識や敵対意識を深くいだくのは、巷の人々が言語学を知らない素人だからではない。ことばを話しているのは巷の素人たちであり、言語の真髄も言語学者が独占すべきではなく、この素人たちの話すこと、そしてことばに対する意識のなかにこそあるはずである（じつは、文字の問題に熱狂するのは、プロの言語学者でも同様である。一例を出すと、韓国でハングルだけを使うか、それとも漢字を入れるかをめぐって激論になり、とうとう椅子を投げるほどの肉弾戦にまでいたったこともある）。

ここでまず、言語の本質は、ほんとうに言語学がいうような意味での「構造」もしくは「体系」にあるのかどうかを検討してみよう。

言語学者コセリウは、ソシュールによるラング／パロール、つまり体系と実現体の二分法にかえて、体系／規範／実現体という三分法をとるべきだという。構造言語学が厳密な意味でいう「体系（Sistema）」とは、［　Ⅰ　］で弁別的な単位がたがいにつくりだす相互関係の網であるかぎり、それは「なにを実現すべきか」ではなく、「なにが実現されるべきではないか」を定めるのみである。だから、その意味で体系は、言語の可能性の領域を限定するだけだという。しかも、「体系」は言語学が学問的関心から構築する抽象的形式であり、それがすぐさま言語の現実態を決定するわけでもない。

それにたいして「規範（Norma）」は、なんらかの実現体の［　Ⅱ　］な類型をつくりだす。だからといって、規範は個々の発話の実現体そのものでもなければ、それらのたんなる総和でもない。規範の役割とは、あくまで体系のさしだす潜在的な可能性を［　Ⅲ　］な現実性に変換することにある。

ただし、コセリウのいう「規範」は、少なくともふたつのことなるレベルでとらえなければならない。ひとつは具体的な言語行為が実際にしたがわねばならないパターンとしての規範であり、もうひとつは話し手が言語にたいしてあてがう価値づけの総体としての規範である。いいかえれば、前者の規範は現実の発話がしたがうべき「型」であり、後者の規範は話し手が言語をどのように思い浮かべるか、つまりは言語の「表象」であるといえる。そして、話し手が日常的に「○○語」という姿で言語を思い浮かべるとき、ひとびとはまさにこの言語の表象としての規範を思い浮かべているのである。

文字の問題の多くは、この「規範」の領域に属する。第一の意味での規範、つまり「型」やパターンとしての「規範」が、「書く」という活動を支配していることはいうまでもない。オングがいうように、無意識に「話す」ことはありえても、無意識に「書く」ことはありえない。「書く」ことは、書き手の意識をできるかぎり統御することを要求する。「書くこと」はあらゆる点で規範に支配される活動であるからこそ、そこから生まれた「書かれたもの」は規範をつくりだし強化していく力をもつのである。

しかし、a第二の意味での規範、言語の表象を生み出す規範をつくりだすにあたって「書くこと」がいかに重要であるかは、しばしば見すごされがちである。この意味での「規範」の重要性が増大したのは、ひとえに「文字＝書くこと」が出現し、言語を「書かれたもの」のすがたで表象できるようになったときからであろう。いったい文字のない時代に、ある言語の「全体」が表象できただろうか。オングのいうように、声の文化におけることばとは、一瞬のうちに生まれては消え去る出来事の流れなのであって、声に出されずにどこかに潜在的に存在しているはずの言語の「全体」などという抽象的観念は生じるはずはなかったにちがいない。

したがって、どのような文字で書くか、また、その文字でどのように書くかという文字の問題は、たんなる表記法の技術の問題をはるかにこえて、言語がどのような姿で表象されるべきかという言語の規範的表象の成立の問題に深くかかわっているのである。

明治以来、日本がたえず悩みつづけてきたいわゆる「国字問題」は、こうした視点からとらえねばならない。日本語をいかなる文字で書くかという問題は、「日本語」をどのように表象し価値づけるかという問題と密接にかかわっているのである。

〔イ〕よく知られているように、近代日本の国語国字問題は、一八六六年（慶応二）、当時の幕府開成所反訳方であった前島密が、十五代将軍徳川慶喜へ上申した建白書「漢字御廃止之議」によってその幕をあける。まず、その建白書の趣旨を要約しているともいえる冒頭部分を見てみよう。

「国家の大本は国民の教育にして、其の教育は士民を論ぜず、国民に普からしめ、之を普からしめんには成るべく簡易なる文字文章を用ゐざるべからず。其の深邃高尚なる百科の学に於けるも、文字を知り得て後に其の事を知る

如き艱渋迂遠なる教授法を取らず、渾て学とは其の事理を解知するに在りとせざるべからずと存じ奉り候ふ。果して然らば、御国に於ても西洋諸国の如く音符字（仮名字）を用ゐて教育を布かれ、漢字は用ゐられず、終には日常公私の文に漢字の用を御廃止あひ成り候ふ様にと存じ奉り候ふ。」

〔ロ〕前島の議論をささえているのは、言語さらにはその音声の記号である文字は、けっして真の知識の対象ではなく、その知識を伝達するためのたんなる道具にすぎないという功利主義的な言語道具観である。このような観点からすれば、文字はできるだけ忠実に音声に対応するべきであり、文字言語は「万人一目一定音を発する利」をそなえていなければならない。真の知識は［　X　］のなかにあるという実学思想が、前島の漢字反対論の核をなしていた。こうした立場から前島は、漢字という文字が近代的知識の獲得と伝達にはなはだそぐわないものであると考えたのである。

〔ハ〕さらにここに、漢字反対論を生み出したひとつの重要な要因として、中国文明からの離脱の意志と西洋文明への志向を指摘することができる。前島は、音声文字と形象文字の対立が西洋文明と東洋文明との対立を凝縮してあらわしているとみなしたのである。

〔ニ〕前島によれば、日本が政治的にも文化的にも停滞した根本の原因は、「無見識なる彼国〔中国〕の文物を輸入すると同じく、此の不便無益なる形象文字をも輸入して、竟に国字と做して常用するに至」ったことにある。しかし幸いにも、日本は日本独自のものでありながら西洋とあい通じるものをもっている。それが「音符字」の仮名文字である。前島は「御国に於ては毫も西洋諸国に譲らざる固有の言辞ありて、之を書するに五十音の符字（仮名字）」があるという。日本に仮名文字という音表文字があるということにこそ、中国がおちいっているような危機から日本を救いだし、近代化へとふみだすための可能性があると前島は考えたのだろう。

〔ホ〕「只彼の文字を用ゐず仮名字を以て其の言辞を其の儘に書記するは、猶英国等の羅甸語等を其の儘入れて其の国語となし、其の国の文字綴を以て書記すると同般」であるという。つまり、近代ヨーロッパの俗語がラテン語からの遺産を滋養としながら、その支配から脱けだして近代国民国家の言語となっていった過程は、日本語が漢語漢文にたいしてとるべき道をはっきりと指し示していると前島はとらえていた。前島が最終的に目ざしたのは、まさに漢字廃止による文章の簡略化とそれにもとづく普通教育の実施によって、近代国民国家の基礎となるべき〈国民〉を創り出すことであった。

（イ・ヨンスク『「国語」という思想』による）

注

アカデミー・フランセーズ……フランスの国立学術団体の一つ。フランス語の基準を作ることをその役割としている。

コセリウ……ルーマニア生まれの言語学者。（一九二一～二〇〇二）

ソシュール……スイスの言語学者。（一八五七～一九一三）

オング……アメリカの哲学者。（一九一二～二〇〇三）

深邃高尚……奥深いこと。

艱渋迂遠……物事が困難で遠回りであること。

B

国家の大本は国民の教育にして、其の教育は士民を論ぜず、国民に普からしめ、之を普からしめんには成るべく簡易なる文字文章を用ゐざるべからず。其の深邃高尚なる百科の学に於けるも、文字を知り得て後に其の事を知る如き艱渋迂遠なる教授法を取らず、渾て学とは其の事理を解知するに在りとせざるべからずと存じ奉り候ふ。果して然らば、御国に於ても西洋諸国の如く音符字（仮名字）を用ゐて教育を布かれ、漢字は用ゐられず、終には日常公私の文に漢字の用を御廃止あひ成り候ふ様にと存じ奉り候ふ。漢字御廃止と申し候ふ儀は古来の習用を一変するのみならず、学問とは漢字を記し漢文を裁するを以て主と心得居り候ふ一般の情態なるに、之を全く不用に帰せしむると申すは容易の事にはこれ無く候へども、能く国家の大本如何を審明し、御廟議を熟せられ、而して広く諸藩にも御諮詢遊ばされ候はば、其の大利益たること判明せられ、存外難事に非ずして御施行あひ成り得べきやと存じ奉り候ふ。目下御国事御多端にして、人々競ひて救急策を講ずるの際、此の如き議を言上仕り候はば、甚だ迂遠に似て、御傾聴下し置かれ候ふ程も如何御座あるかと憚り入り存じ奉り候へども、御国をして他の列強と併立せしめられ候ふは、是より重且大なるはこれ無きやに存じ奉り候ふにつき、恐懼を顧みず敢て言上奉り候ふ。学事を簡にし普通教育を施すは、国人の知識を開導し、精神を発達し、道理芸術百般に於ける初歩の門にして、国家富強を為すの礎地に御座候へば、成るべく簡易に成るべく広く、且成るべく速に行き届き候ふ様、御世話御座ありたき事に存じ奉り候ふ。然るに、此の教育に漢字を用ゐるときは、其の字形と音訓を学習し候ふため長日月を費し、成業の期を遅緩ならしめ、又其の学び難く習ひ易からざるを以て、就学する者甚だ希少の割合にあひ成り候ふ。稀に就学勉励仕り候ふ者も、惜むべき少年活発の長時間を費して、只僅かに文字の形象呼音を習知するのみにて、事物の道理は多く暗昧に附し去る次第に御座候ふ。実に少年の時間こそ事物の道理を講明するの最も好時節なるに、此の形象文字の無益の古学のために之を費し、其の精神知識を頓挫せしむる事、返すも返すも悲痛の至に存じ奉り候ふ。抑御国に於ては毫も西洋諸国に譲らざる固有の言辞ありて、之を書するに五十音の符字（仮名字）これ有り。一の漢字を用ゐること無くして世界無量の事物を解釈書写するに何の故障もこれ無く、誠に簡易を極むべきに、中古人の無見識なる彼国の文物を輸入すると同じく、此の不便無益なる形象文字をも輸入して、竟に国字と做して常用するに至りたるは、実に痛嘆の至に御座候ふ。恐れ多くも御国人の知識此の如くに下劣にして、御国力の此の如くに不振に至りたるは、遠く其の原因を推せば其の素の毒を茲に発したるなりと、痛憤に堪へず存じ奉り候ふ。

漢字を御廃止あひ成り候ふとて、漢語即ち彼国より輸入し来れる言辞をも併せて御廃止あひ成る儀には御座無く、只彼の文字を用ゐず仮名字を以て其の言辞を其の儘に書記するは、猶英国等の羅甸語等を其の儘入れて其の国語となし、其の国の文字綴を以て書記すると同般にするの謂に御座候ふ。

（前島密「漢字御廃止之議」による）

注　廟議……朝廷の評議。

問一　Aの文章の空欄 Ⅰ Ⅱ Ⅲ に入る語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
イ	積極的	消極的	消極的
ロ	積極的	積極的	消極的
ハ	消極的	積極的	消極的
ニ	消極的	積極的	積極的
ホ	消極的	消極的	積極的

問二　Aの文章の空欄 X に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　「コト」ではなく「オト」
ロ　「オト」ではなく「コトバ」
ハ　「コトバ」ではなく「モノ」
ニ　「モノ」ではなく「ココロ」
ホ　「ココロ」ではなく「モジ」

問三　Aの文章には次の一文が脱落している。入るべき最も適切な箇所をAの文章中の〔イ〕～〔ホ〕から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ただし、前島は漢字廃止を提言したからといって、漢語まで廃止しようとはしなかった。

問四　Aの文章の傍線部a「第二の意味での規範、言語の表象を生み出す規範をつくりだす」ためにすべきこととして、Bの文章が考える内容を最も端的に示している一文をBの文章中から抜き出し、**始めの五文字**を記述解答用紙の所定の欄に記せ。句読点も字数に数える。振仮名がある場合は省略すること。

問五　Bの文章の傍線部イ～ニの「文字」のうち、「漢字」を**指していない**ものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　社会階級によらず国民全体に教育を行き渡らせるようにするため。
ロ　さまざまな領域の知識を速やかに習得できるようにするため。
ハ　中国の漢字文化に影響される前の固有の日本語を復元するため。
ニ　日本を世界的に有力な他国と肩を並べられるような国にするため。
ホ　若い人たちにとっての貴重な時間を浪費することを避けるため。

問六　Bの文章が漢字の廃止を主張する理由として、**正しくない**ものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　Aの文章は、言語の本体はオトであって文字ではないとされているにも関わらず、どのような文字を採用するかの問題に人々が情熱を傾け感情的にもなる理由について、文字がなければ言語表現が不可能だからだとしている。
ロ　Aの文章は、話し手が言語をどのように思い浮かべるかを意味する「規範」について、音声による言葉しか存在しない段階ではその概念が生じ得ず、言葉が文字化されることで初めて思い浮かべられるものだと考えている。
ハ　Aの文章は、言語学者が唱える言語の「体系」すなわち「なにが実現されるべきではないか」にあたるものとして、Bの文章においては漢字漢文で文章を書いていくことが挙げられていると考えている。
ニ　Aの文章は、Bの文章の主張を近代的な言語道具観から来るものと捉えており、その一面的な価値観で西洋文明を重んじ東洋文明を軽んじたことに対し、当時の時代背景をふまえてもやはり短絡的であったと評価している。
ホ　Bの文章は、十五代将軍徳川慶喜へ漢字の廃止を上申するにあたり、実現の不可能性や効果の低さの観点から、意見が受け入れられないかもしれないことを想定しつつも、その重要性を主張する態度をとっている。
ヘ　Bの文章は、日本語が西洋諸国の言語に劣ることを懸念しており、その原因をこれまで日本が強く影響を受けてきた中国文化によるものと断罪した上で、中国文化の影響を受けていない仮名文字の使用を推奨している。

問七　A・Bの文章の内容に合致しているものを次の中から**二つ**選び、解答欄にマークせよ。

（二）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

翻訳者を中心に捉えて翻訳という行為を考えると、何が見えてくるのでしょうか。ひとつとても重要なのは、翻訳という行為をどのような比喩をもってイメージするか、ということではないかと思います。アメリカでは、ほとんどの人が翻訳を単純な作業と考えています。翻訳者が原文を見て、そこに出ている言葉を、［　Ⅰ　］、と思っているようです。たとえば、日本語の「すみません」を英訳するとします。『新和英大辞典』を引けば「すみません」の項目に「I'm sorry」が出ているので、簡単な作業ですよね。ほかに「excuse me」「forgive me」「Hello!」「thank you」など、色々なオプションが出ています。さらに「Yes, sir」「Is anyone there?」など、辞書には載っていないが文脈によって適切と思われる選択肢がいくつもあります。翻訳者は文脈から判断して、もっともふさわしい言葉を選択するだけですから、そんなに難しくないでしょう、と思われているわけです。〔イ〕

ここで問題になるのは、「すみません」のような単純きわまりない事例の場合でも、言葉の意味を理解し、その意味に当たる英語の表現を選択するときに、翻訳者の頭のなかでいったい何が起きているのか、まったくわからないことです。人間がある言語から別の言語に移るときにどのように意味を持ち越すか、そもそもどのように言葉を理解するかは、非常にベーシックなことでありながら、全然わからないわけです。言語というのはまったくのミステリーです。〔ロ〕

こういうミステリーを、人間はごまかしてやりすごします。わからないから、比喩に頼ってわかったつもりになるのです。よくあることです。たとえば、人間は死ぬとどうなるかわかりません。「幽霊になる」とよく言われます。でも幽霊になるのは、具体的にはどのようなプロセスなのか。頭の天辺から始まるのか、まず足が消えるのか、心臓から何やら幽霊に育つ分泌物が滲み出るのか。それとも、体のどこかに隠れていた魂が、息絶える寸前の人間の体格とかどんな洋服を着ていたかなどを事細かく研究して、何らかのメカニズムでそれをコピーするのか――そんなことを考えても始まりません。というよりも、人間が亡くなるとどうなるかという考えてもしようがないことを考えないで済むように、A幽霊という比喩が作り出されたわけです。〔ハ〕

言語と翻訳の場合でも、同じことが起きています。たとえば「意味が通じる」と言うでしょう。「通じる」の意味を『日本国語大辞典』で引くと、「道路などがある地点まで達する。道筋がつながって、ある地点まで行けるようになる。また、交通機関が通る。とどく、つながる。」とある。「意味が通じる」という言い方は、この空間的な意味の［　Ⅱ　］にほかなりません。話し手から聞き手に意味が「通じた」と言えば、電話が通じたときと同様のことが起きているように聞こえます。電話線の代わりに、目に見えないくらい細い「意味線」とやらが張ってあって、話し手の言おうとしていることがその線をさっと伝わっていく。また、意味を伝えるために私たちは言葉を使うのですが、言葉は「意味をもつ」と言います。郵便配達員が手紙を持ってきてくれるように、言葉は意味をもってきてくれます。ピンポン。「はい？」「あ、すみません、言葉です。意味を届けに参りました」「そうですか、すみませんが、縁側の方に持ってきていただけますか」――というのは大げさかもしれませんが、言語の不可解さをカイヒ[1]するために私たちが用いる空間的な比喩の作用を突き詰めていくと、結局はそのようなことになるかと思います。〔ニ〕

英語でも事情はほぼ同じです。言語の基本的な機能を端的に表している communicate は、もともとふたつの部屋などが隣り合っていて、ひとつめの部屋から直接、次の部屋に行けるという意味をもっています。英語の communicate は、日本語の「通じる」と通じるところがあるわけです。

翻訳も「コミュニケーション」の変種として捉えられがちです。翻訳は異言語間・異文化間のコミュニケーションであるという言い方をよく耳にします。「こんな翻訳じゃ、意味がぜんぜん通じないじゃないか」とか、「ニュアンスが細部まで伝わる名訳」というように、言語の不可解さを紛らわすために愛用される比喩をそのまま翻訳に当てはめたりもします。〔ホ〕

B普通に言葉を使うときは話し手と聞き手しかいませんので事は比較的簡単です。その一方で、翻訳では、不可解なものがもうひとつ加わってしまうのです。ほかならぬ、翻訳者です。翻訳のことを考える場合、話し手と聞き手だけではなく、その間に立つ翻訳者もいます。ある翻訳で「意味が通じた」場合、翻訳者を通して通じたということです。もう既に比喩が現れ、私たちのC翻訳にまつわる考え方を支配しようとしていますね。「話し手と聞き手だけではなく、その間に立つ翻訳者」と私は何気なく言いましたが、これも比喩です。先ほど「人間がある言語から別の言語に移るときにどのように意味を持ち越すか」という表現も使いました。考えてみれば、「異言語間・異文化間のコミュニケーション」という言い方も、言語と文化を、いわば空間的な領域として把握した上で成り立っている比喩的な表現です。これらの表現も、微妙な形で翻訳者という存在のリンカク[2]を、比喩的に形づくっています。異言語間・異文化間のコミュニケーションといったら、当然ながらそれぞれの言語・文化は別々の領域として存在していることになり、異なるふたつの領域は「間」と言えるものを挟んでいることになります。そして、翻訳者はその「間」に陣取って、翻訳を行うイメージが浮かんできます。

（マイケル・エメリック『てんてこまい　文学は日暮れて道遠し』による）

問八　次の文は本文中に入るべきものである。本文中の〔イ〕～〔ホ〕から最も適切な箇所を一つ選び、解答欄にマークせよ。

もちろん、それは違います。

問九　空欄 Ⅰ に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　印象的な表現を駆使すること
ロ　比喩の巧い使い方がすべてだ
ハ　別の言語に置き換えるだけだ
ニ　効率的な文章で構成すること
ホ　翻訳者の好みに翻訳するだけ

問十　傍線部A「言語と翻訳の場合でも、同じことが起きています」とあるが、そう述べる理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　言語と翻訳についても、考えても仕方のない比喩についてあれこれと思いを巡らし、納得したつもりになるから。
ロ　言語と翻訳についても、空間にまつわる比喩を使って、不可解なところをごまかし、理解したつもりになるから。
ハ　言語と翻訳についても、意味が通じることばかりを考えて、どのような比喩を使うかについては吟味しないから。
ニ　言語と翻訳についても、聞き手が関心を示す比喩を選択することに集中し、言語の本質を十分に理解しないから。
ホ　言語と翻訳についても、比喩表現の理論化に気がとられ、感情的な問題を重視せずにないがしろにしているから。

問十一　空欄 Ⅱ に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　推測
ロ　変質
ハ　逆転
ニ　敷衍（ふえん）
ホ　欺瞞（ぎまん）

問十二　傍線部B「普通に言葉を使うときは話し手と聞き手しかいませんので事は比較的簡単です」とあるが、そう述べる理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　話の理解には話し手と聞き手の相性が重要だから。
ロ　言語の理解は話し手の説明する力に依存するから。
ハ　明快であるには聞き手の十分な理解が必要だから。
ニ　不可解なのは言語の働きそのものだけであるから。
ホ　文の不可解は言葉の文脈だけに起因しているから。

問十三　傍線部C「翻訳にまつわる考え方を支配しようとしています」というのはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　比喩によるイメージによって、翻訳という行為を理解したつもりにさせられること。
ロ　優れた翻訳を達成するため、正しい翻訳の実態を理解することが強制されること。
ハ　翻訳という行為のイメージは多様なのに、その一つを正しいとせざるをえないこと。
ニ　翻訳を行うために、翻訳者は原文の意味やニュアンスに支配されざるをえないこと。
ホ　翻訳者であろうとする自覚が、却って翻訳という行為の正しい理解を妨げること。

問十四　傍線部1・2のカタカナの部分を漢字に直し、記述解答用紙の所定の欄に記せ（楷書で丁寧に書くこと）。

（三）次の甲・乙の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

甲

※この問題は、著作権の関係により掲載ができません。

※この問題は、著作権の関係により掲載ができません。

注

アビダルマ……仏教教理の理論。経・律・論の三蔵のうちの論蔵。
般涅槃……入滅し、完全な悟りの世界に入ること。
釈迦牟尼……約二千五百年ほど前にインドに出現した聖人。釈迦。仏陀。
信宿……二晩。
初夜・後夜……一日を六時に分けて勤行するうちの、夜のはじめと、明け方の時間帯。
小乗……大乗（大きな乗り物）に対する、小さな乗り物の意。大乗教徒側からの貶称（へんしょう）であるため、この語は現在の仏教では一般に使用しない。
貞観元年……唐の年号。西暦六二七年。
支提塼塔……火葬した遺骨を納めるため瓦で造った塔。
蘭陵……地名。現在の中国山東省臨沂市。　蕭鈞……人名。

乙［次の文章は、『栄花物語』巻三十「つるのはやし」の一節である。『栄花物語』では、藤原道長の超越性を讃える傾向が強い。甲の文章のような考え方は、中国・日本で撰述された高僧伝・往生伝を通じて、平安時代の僧俗に影響を与えたと考えられている。以下の一節は、道長の臨終前後の描写であるが、その「聖者性」が特に際立つ場面である。］

十二月二日、イ常よりもいと苦しうせさせたまへば、女院、中宮、上の御前も、いとゆゆしう思ひたてまつらせたまひて、関白殿にせちに申させたまへば、人々出して見たてまつらせたまふに、あはれに悲しういみじうて、ほとほと御声たてさせたまひつべし。さて帰らせたまひぬれば、僧たち近うさぶらひて、御念仏をして聞かせたてまつる。されど、その日おこたらせたまひつ。このほど、内、東宮より御使いみじかりつ。今になほ弱げにおはしませど、ただこの御念仏のおこたらせたまはぬにのみ、おはします定にてあるなり。またの日も、今や今やと見えさせたまへれど、ことなくて過ぎさせたまひぬ。

ついたち四日、巳の時ばかりにぞ、うせさせたまひぬるやうなる。されど御胸より上は、まだ同じやうに温かにおはします。なほ御口動かせたまふは、御念仏せさせたまふと見えたり。そこらの僧涙を流して、御念仏の声惜しまず仕うまつりたまふ。「臨終のをりは、風火まづ去る。かるが故に、動熱して苦多かり。善根の人は地水まづ去るが故に、緩慢して苦しみなし」とこそはあんめれ。されば善根者と見えさせたまふ。あはれに、内、東宮の御使ぞ隙なき。日ごろいみじう忍びさせたまへる殿ばら、御前たち、声も惜しませたまはず、げにいみじや。御堂の内のあやしの法師ばらのもの思ひなげなりつるが、庭のままに臥しまろぶ、げにいみじ。世界の尊き尼法師さへ集まりて、「仏の世に出でたまひて、世をわたしたまへる、涅槃の山に隠れたまひぬ。われらがごときいかに惑はんとすらん」など、言ひつづけ泣くも、いみじう悲し。夜半過ぎてぞ冷え果てさせたまひける。御棺は悩みそめさせたまひし日より造らせたまへれば、やがて入棺したてまつりつ。いみじう御声どもまさなきまでおはしまさふ。またの日、陰陽師召して問はせたまふに、「七日の夜せさせたまふべし、所は鳥辺野」と定めまうしてまかでぬ。

七日になりぬれば、つとめてよりいそぎせさせたまふ。例の事ども推しはかるべし。日暮れぬれば、御車に舁き乗せたてまつりておはしますに、その日つとめてより夜まで雪いみじう降る。さるべき人々、例の装束の上にあやしの物ども着て、雪消えあへず降りかかりたるも、さまざまにあはれに悲し。「よろづ事削ぎて、ただ形のやうに」と仰せられけれど、事かぎりありて、人の続きたちたるほど、十二十町ばかりありぬべし。今は出でさせたまふ。無量寿院の南の門の脇の御門より出でさせたまふ。かの釈迦入滅の時、かの拘尸那城の東門より出でさせたまひけんに違ひたることなし、九万二千集まりたりけんにも劣らず、あはれなり。

注　ついたち四日……上旬の四日。十二月四日のこと。
鳥辺野……平安京の葬送地。東山にある。
無量寿院……藤原道長によって創建された法成寺の阿弥陀堂。鴨川の西岸にあった。
拘尸那城……釈迦の入滅地。

問十五　甲の文章における傍線部1「大乗仏教徒が小乗の修行をしていたかの如き、紛らわしい書きぶり」と、なぜ述べるのか。その説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　僧伝に見られる頂暖や屈指の奇瑞は、アビダルマ教理学の考えに基づいたもので、大乗仏教徒の修行の階梯とは異なるものだから。
ロ　大乗を信奉する仏教徒が、小乗の修行を行う仏教徒と対立したとき、自らの存在意義を示すため、わざと難解な議論を行ったから。
ハ　婆羅門教においてアートマンがすべての精神活動を司ると考えられたが、大乗仏教ではその存在を肯定するため齟齬が生じたから。
ニ　アビダルマ教理学において「頂暖」の理論が発達したが、それを大乗仏教に取り入れることによって議論が飛躍的に発展したから。
ホ　大乗仏教では、アートマンは心臓にとどまるのではなく、体中を自由に動き回ると解したため、婆羅門教との間に矛盾が生じたから。
ヘ　五臓六腑にアートマンが存在するという婆羅門教の考えと、マナスに相当する心の働きを軽視する大乗仏教の考えが衝突したから。

問十六　甲の文章における傍線部2「善修三業無令一生空過。」の読み下し文として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　善修の三業は、一生の空過にしくはなし。
ロ　善く三業を修するに令なく、一生を空しく過ぐさしめん。
ハ　善く三業を修し、一生をして空しく過ぐさしむることなかれ。
ニ　善く三業を修すれば、一生を空しく過ぐすことなからしめん。
ホ　善を修さば、三業に令することなく、一生を空しく過ぐさん。
ヘ　善をして三業を修さしめ、一生をして空しく過ぐすことなからしめん。

問十七　甲の文章における空欄 I に入る漢字一字を、甲の文章の漢文の引用部分から選び、記述解答用紙の所定の欄に記せ（楷書で丁寧に書くこと）。

問十八　甲の文章における傍線部3「攀轅扶轂」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　慧因の死を悲しみながら整列をしないで行進する
ロ　猿が木によじのぼるように見物人が道にあふれる
ハ　車に登ったり穀物をばらまきながら行列に加わる
ニ　力任せに車を引くものや車を押す者があらわれる
ホ　葬送の車に大ぜいでとりすがったり引いたりする
ヘ　激しい喜怒哀楽の表現を行いながら葬列を見送る

問十九　乙の文章における傍線部イからヘのうち、藤原道長の「聖者性」を示すものをすべて選び、解答欄にマークせよ。

問二十　乙の文章における傍線部4「おこたらせたまひつ」とあるが、この意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　お祈りの効験もあらわれなかった
ロ　起き上がることもなさらなかった
ハ　お伝えするのを失念してしまった
ニ　心配事もみな解消されてしまった
ホ　念仏をついつい怠けてしまわれた
ヘ　病状が少しだけ快方にむかわれた

問二十一　乙の文章における傍線部5「仏の世に出でたまひて、世をわたしたまへる、涅槃の山に隠れたまひぬ」の説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　仏はまず天上界にお生まれになった後、この世に降り人々と楽しく交わり、最期は涅槃山の奥深くで人知れずお亡くなりになられた。
ロ　仏は母を済度するため忉利天において説法していたが、人間界に戻ってただちに涅槃に入り、仏教の教えをインド全土に広められた。
ハ　仏がこの世に出現なさり、世の人々を済度した後、涅槃を得て去っていかれたように、藤原道長様もお亡くなりになってしまわれた。
ニ　釈迦は人々の間に入って積極的に交際を深めておられたが、ついには人里離れた山の奥で修行し、お悟りになった内容を広められた。
ホ　釈迦はこの世に人としてお生まれになり、インド全土を広くめぐり渡りながら、涅槃山に隠棲して一人で静かにお過ごしになられた。
ヘ　釈迦が人としてインドに出現なさったように、藤原道長様もその化身の聖者として日本に誕生され、浄土のような世界を実現された。

問二十二　乙の文章の傍線部X・Y・Zの敬語は、次のaからfの誰を、それぞれ敬意の対象としているか。その答えの組み合わせとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

a　藤原道長　　b　女院・中宮・上の御前　　c　関白殿
d　僧たち　　e　内・東宮　　f　釈迦

イ　X－a・Y－a・Z－a　　ロ　X－b・Y－a・Z－f
ハ　X－b・Y－c・Z－d　　ニ　X－c・Y－c・Z－a
ホ　X－d・Y－e・Z－f　　ヘ　X－e・Y－a・Z－c

問二十三　乙の文章がその死を描く藤原道長は、康保三年（九六六）に生まれ、万寿四年（一〇二八）に逝去した。次のイからヘの作品の説明の中から、その成立時期もしくは内容が、道長の生存期間に合致・該当**しないもの**を一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　鏡物といわれるジャンルの嚆矢（こうし）で紀伝体による歴史物語。
ロ　歌人の娘で中宮に仕えた女性によって書き綴（つづ）られた冊子。
ハ　作り物語の最高峰として後代に大きな影響を与えた物語。
ニ　天皇の命令を受け四人の撰者が編集した二十巻の和歌集。
ホ　節を付け歌うための漢詩句や和歌を分類編集した朗詠集。
ヘ　最も高名な物語作家が出仕の生活などを書き綴った日記。

問二十四　甲・乙の**いずれか**の文章の趣旨と合致するものを、次の中から**二つ**選び、解答欄にマークせよ。

イ　人が死ぬ瞬間に、識が足先から抜けると地獄などの悪趣に堕ち、臍から抜けると人に生まれ変わり、頭から抜けると天に生まれ変わり、心臓から抜けると解脱して悟りを得ることができる。
ロ　宝瓊は臨終後の二日間、頭頂が暖かで三本の指を曲げていたが、慧曠は頭頂が暖かかったものの、指を二本しか曲げていなかったので、死後に良い世界に生まれ変わることができなかった。
ハ　死の瞬間に、素晴らしい香りに満たされる者がまれに出現するが、これはマナスが体内を動き回ることによって発せられる芳香であり、聖者が悟りを開いた証拠としてたいへん尊崇された。
ニ　求那跋摩は臨終の後も、縄床に足を組んで座っていたが、龍蛇のようなものが屍体の側から突然出現して天を衝いて上昇したため、人々は阿羅漢果に到達できなかったことを悟り悲しんだ。
ホ　藤原道長は、病に苦しみながら臨終を迎えたが、僧たちの読経の効験によっていったん蘇生して、安らかに念仏を称（とな）えながら世を去ったため、周囲の人物は極楽に往生した証拠だと喜んだ。
ヘ　藤原道長の棺は生前に用意してあり、死の三日後に鳥辺野に葬送すると定めて、雪の中に車は出発したが、その葬列は釈迦の入滅の際に九万二千人が集まったことに匹敵するほどであった。

〔以　下　余　白〕

〈2023 R05172023〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意） 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

（採点欄）

（一） 問四

（二） 問十四

（三） 問十七

〈2023 R05172023〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意） 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

国語（記述解答用紙）

（一） 問四

（二） 問十四

1

2

（三） 問十七